下限は19世紀」とみることが可能である。

以上のことから，当遺跡出土遺物の多くは，15世紀前後を中心に位置づけられるものと考えられる。

3　遺構と遺物から窺う塩づくり

当初の調査は，沢田遺跡には，「千々乱風」伝説があり，当初その伝説が解明されるのではないかと期待されていたが，調査の結果，大規模な揚浜式製塩跡であることが判明した。ここでは，前述した遺構と遺物とを絡めて当遺跡の全体像を簡単に述べてみることにする。

当遺跡で検出された遺構は，瀬戸内で行われている入浜式製塩ではなく，大規模な揚浜式製塩である。揚浜式製塩は，まず人力で汲み上げた海水を砂浜にまいて天日乾燥させる。次に，塩分が付いた砂を集め，海水をかけて砂についた塩分を溶かし出し，濃い塩水（鹹水）を作りだす。さらに，この濃い塩水を釜で煮つめて塩を取り出す方法を言う。

当遺跡から検出された製塩跡は揚浜式製塩跡で，一般的な形態は，釜屋があって，釜屋内の中心部あるいは北寄りには竈がある。その東側の海よりには2基の小形の鹹水槽が，南側には苦汁を抜く居出場(水槽)が位置している。さらに，釜屋外には東側の海よりに大形の鹹水槽が5～6基ほど南北に並んでいる。そして，大形の鹹水槽と釜屋内の小形の鹹水槽の間を土樋で結んでいる。

当遺跡における揚浜式製塩跡は，担い棒に桶を二つ下げて浜辺に行き，人力で海水を汲み上げ，何度も砂浜にまいて日光で海水を乾燥させ，塩の付着した砂を海水で流して濃い塩水（鹹水）を作り，屋外の大形鹹水槽に溜めていた。鹹水は必要に応じて鹹水槽から柄杓で汲み上げ，土樋を通して釜屋内の鹹水槽に少しずつ流し，釜屋内の南側の鹹水槽に溜めていた。釜で鹹水を煮つめる時には，釜屋内の北側の鹹水槽に南側の鹹水槽の鹹水をろ過して，泥などを取り除いた濃い塩水を溜め，柄杓で汲み上げ何度も釜に入れ，釜の中に結晶した塩が一杯になるまで塩焚を行う。塩焚が終わると，釜の中の結晶した塩を釜柄振で押し引きして集め，塩のなかに混じっている苦汁を取り出すために，竈の南側に付設されている居出場と呼ばれる水槽の上の篭に入れ，一昼夜置いて苦汁を下垂れさせて水槽に溜める。その後は，苦汁のぬけた塩を叺(かます)に入れ，目方をはかり，俵装したと思われる。

これらの一連の工程は，江戸時代に描かれた絵巻で「行徳の製塩作業場」（江戸名所図会）に同じような風景が見られる。さらに，その後，俵装された塩は，倉庫などに格納し，馬などに積んで各地へ運びだされたものと思われる。

なお，塩焚でできた灰は，当時は大切な肥料で，灰掻き出し柄振で竈内から掻き出して大事に保管し，畑等の肥料にしたと思われる。

第338図　沢田遺跡の揚浜式塩づくり予想図

当地でこの揚浜式製塩法が，古くから行われていた理由は，南北3.2kmに及ぶ長い砂丘地帯を有する地理的条件にある。次いで，塩焚の時に必要な多くの燃料用の木材を，近くの山林から得やすいことである。この二つの製塩業の要件については，廣山堯道氏（1978）の著書[12]で述べられているように，若狭・伊勢の地と同じで，日本海側と太平洋の外海に面し，潮の干満差が小さく波の荒い海岸に見られる。しかし，海岸に砂浜がない能登半島では，海面より一段高い場所に，粘土で人工の塩浜の地盤（塗浜）を築いた方法で行っている[12]。この地理的条件を当遺跡に照らしてみると，ぴったり一致するものがあり，特に「塩田」といわれている遺構は存在しない揚浜式製塩が行われていたものと思われる。廣山氏は，茨城県の太平洋沿岸には砂浜が多く，揚浜系の塩浜が始められたのは「親鸞伝絵」に見られるごとく，鎌倉時代頃と見ている。

当遺跡での製塩の開始時期は，製塩跡からの出土遺物や文献資料からはいちがいに決定できないが，鎌倉時代後半に位置づけられるものと思われる。そして，第1節で述べたように，15世紀頃から「千々乱風」伝説が生じた元和年間（桃山時代）頃までが，当遺跡における製塩の最盛期であったと思われる。江戸時代中期頃から瀬戸内の格安の塩の移入によって影響を受け，製塩業の規模は縮小の一途をたどっていったが，明治時代以降も細々ながら製塩を行っていたものと思われる。

注・参考文献

(1) 浅野晴樹　「関東における中世在地土器について」　『研究紀要第4号』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1988年

(2) 茨城県教育財団　「屋代B遺跡III」　茨城県教育財団文化財調査報告第45集　1988年

(3) 栃木県教育委員会　「赤塚遺跡」　栃木県埋蔵文化財調査報告書第36集　1981年

(4) 栃木県上三川町教育委員会　「大町遺跡」　上三川町埋蔵文化財調査報告書第５集　1984年

(5) 足立順司　「内耳土器について」　『研究連絡誌第６号』　千葉県文化財センター　1982年

(6) 津田芳男　「所謂内耳土器について」　『茂原市文化財センター年報№3』　茂原市文化財センター

(7) 楢崎彰一　「日本の陶磁３　古代・中世　瀬戸・美濃」　学生社　1990年

(8) 楢崎彰一　「日本の陶磁４　古代・中世　常滑・渥美・猿投」　学生社　1990年

(9) 芸術新潮編集部　「やきもの鑑定入門」　新潮社　1983年

(10) 古泉弘　「江戸の街の出土遺物」　『季刊考古学第13号』　雄山閣　1985年

(11) 矢島恭介　「日本出土銭貨一覧」　『日本考古学辞典』　東京堂　1962年

(12) 廣山堯道　「塩の日本史」　雄山閣　1990年